

# む

かしむかし、あるところ、それはそれは小さな村がありました。その村には、ちょうどひと回りできる広いあぜ道が2つあって、村人たちは畑しごとのあい間をみつけては荷車ひきのきょうそうをして楽しんでいました。

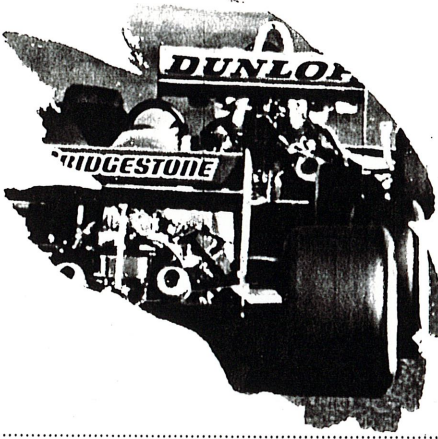
ところが、うわさを聞いた近くの村の人たちが見学にくるようになり、だんだんさかんになってきました。そのうち近くのたばこ屋のじいさんや、ひきやくのおじさん、じゅばん屋のおにいさんたちが村人たちにお金を出して荷車にのぼりを立てるようになりました。それから、村人たちはもつといっしょうけんめいきょうそうするようになりました。しかし、村人たちには良い荷車を作る力がなかったので、遠い国の町で作った荷車を買っていました。車輪は村の石橋屋や住友屋で売っていましたが、そのうち石橋屋も住友屋もきょうそうに夢中になって、特別にはやい村人には車輪をくれるようになりませんでした。お金もちの石橋屋はいっぱいお金を出して、村の中でもいちばんはやい星じいやけいじいや若者のあがりんやその他にもいっぱいの村人にお金やとくべつの車輪をあげて、いつもきょうそうに勝ってはじまんしていました。村のはずれにある住友屋はあまりお金がかかったのでほとんどの村人は石橋屋に行っていました、いつも石橋屋に負けるようになってしばしばいました。しかし、住友屋の仲間には荷車作りのわらべがいて、遠い国から荷車ひきき呼んできていっしょうけんめいがんばっていました。しかし、なかなか石橋屋には勝てません。でも、わらべはきょうそうも好きですが、荷車作りはもつと大好きでした。わらべにはもつと大きな夢がありました。それは遠い国でもつとはやい荷車のきょうそうがあることを知っていたので、自分で作った荷車をそこでばらばらしてみたい

## 村の鎮守のお祭りでお祭りで……

林みのる 童夢代表

という夢です。

わらべは石橋屋の車輪できょうそうしているけいじいは大の仲良しでした。わらべとけいじいはいつも夜になるといりりを囲んできょうそうのはなしばかりしていました。いっしょうけんめいきょうそうはやい荷車をつくらうといっしょうけんめいきょうそうにしました。わらべが新しい荷車を作り、けいじいははして悪いところをなおして



はやい荷車にしようとするだんじました。わらべはきょうそう山奥に出かけ、それは苦勞してみんなが使っていない固い木をさがして、とくべつな方法ではやい荷車を作りはじめました。これをけいじいにあずけ、助けあつてはやい荷車にするのです。けいじいは以前から、遠い国のもつとはやいきょうそうに使う荷車は、みんな使う人が自分で作っているのに、この村だけ全部よその国から買ってくるの

をふしぎに思っていたので、自分たちが作った荷車ではしるのがうれしくてしかたがありません。さつそく、石橋屋へほうこくに行きました。

ところが、石橋屋の丁稚頭はこのはなしを聞いてたいへんはらを立て、「わらべは住友屋の仲間だからそんなやつで作った荷車ではしるお前に車輪もお金もやらん、でていけ」とおい出されてしまいました。何年も石橋屋のためにはしつてきたけいじいはあまりのことに泣きながらわらべのところに帰ってきました。わらべはもつと腹を立てました。この村では年に一回森の中の鎮守さまで、いちばんはやかった村人にお祝いがおくられます。よその町や国ではいちばんはやい荷車を作った人もお祝いがもらえます。この村には荷車を作る人がいないからお祝いもありません。しかし、はやく良い荷車を作れる人が出てこない、遠い国のもつとはやいきょうそうの仲間には入れてくれないのです。これから、わらべの作った荷車にはどの村人が使おうと石橋屋は車輪をくれません。けいじいはそのあとも石橋屋の小番頭におねがいしたりしていました。わらべは、自分の作った荷車に心のせまい石橋屋の車輪を使う気持ちはまったくなくなっていました。これからけいじいと力をあわせて、石橋屋がほしがらうなりつばな荷車を作つて思いあがつた石橋屋にしかえしをしてやるのです。めでたし、めでたし。